無題

何処へ行った

僕はその扉を知らない
薄暗い路地裏の石畳を歩くこともできない

何処へ行った

カラスが雛鳥を啄んでいる
黒い嘴がさらに黒光りしている
汚く乾いた、どす黒さへと変わってゆく

僕に残された時間は多くない
ふらふらと歩き回り、流離うこと
その中に沈んでゆく歓び

青銅の彫刻でできた大気
その耐えがたい重みと
美しさ———

何処へ行った

小さな籠が揺れている
その中で虚ろに動き回る瞳は
誰を、何者を待っているのか

思いもかけぬ言葉が
練り歯磨きのようにチューブから押し出される
独裁者を祀り上げるための言葉が

灰色の空は何も語らない
かつて血みどろの戦いがあったことも
虫けらどもを踏みつけにして笑っていたことも

何処へ行った

優雅にも風にはためく大きな旗には
かつての繁栄を偲ばせる厳かな紋章が
平等に巷を歩く大衆を見下ろしている

かすかな音を聞き分けること
単に自由であること
相反する、そのふたつ

仮に我々が生き抜くことができたとして
神としての孤独から目をそむけるために
いかなる子を創造するのだろうか

何処へ行った

僕に残された時間は多くない
僕はその扉を知らない

(2011.7.2)